

『多聞天儀軌』について — 『北方真言』との関係性 —

石 井 正 稔

一、はじめに

『摩訶吠室羅末那野提婆喝羅闍陀羅尼儀軌』一卷（以下、『多聞天儀軌』¹）並びに『北方毘沙門天隨軍護法真言』一卷（以下、『北方真言』）の二本は、毘沙門天について説かれた儀軌である。

『多聞天儀軌』は弘法大師空海（七七四～八三五（以下、空海））により、『北方真言』は円行（七七九～八五二）によってそれぞれ日本へ請来されている。

この二本の儀軌は、比較してみるとその構成と内容の一部に類似箇所がみられる。この箇所について同本異訳と指摘されているが、『北方真言』は、『多聞天儀軌』中の類似箇所を抜粋し、更に加筆され編纂された儀軌であると思われる。

二本の類似箇所を比較すると、『多聞天儀軌』中の記述を『北方真言』中では、略して記述されている箇所が多くみられ、また唐代に流行った毘沙門天の影響を受けて付加されたと思われる記述もみられるからである。

そこで本稿では、二本の類似箇所を比較並びに中国における毘沙門天について先行研究を辿りながら確認し、この二本の儀軌の関係性について論じていく。

二、二本の儀軌について

『佛書解説大辞典』では、二本の類似箇所について同本異訳としているが、その原本については不明である。また『開元録』^③や『貞元録』^④等の目録中には、この二本の儀軌を確認することができないことから中国で編纂された儀軌であると思われる。^⑤まず、この二本の儀軌について簡略であるが紹介していく。

二―『多聞天儀軌』について

先にも述べているが、『多聞天儀軌』は空海によって請来されており、『御請来目録』^⑥・『三十帖策子』^⑦・『三字録』^⑧中にそれぞれ『多聞天儀軌』の名前を確認することができる。

『多聞天儀軌』に関して、『佛書解説大辞典』では中国思想と密教思想を融合する目的で、『陀羅尼集経』や『北方真言』等を融合して、唐代において編纂されたと記されている。^⑨このことについては、翻訳者である般若斫羯羅 (prajñā-cakra) が関係している。この名前は梵語の音訳であり翻訳すると智慧輪となる。しかし、空海の『御請来目録』中には、「般若輪三蔵」と記されている。この梵語には般若輪という訳し方もある。またこの儀軌が日本に請来された後に活躍した人物に智慧輪がいる。しかしこの二人の人物は全くの別人である。^⑩よって『多聞天儀軌』の翻訳者（撰述者）は、般若輪と思われる。

また同じく、『御請来目録』によればこの儀軌は旧訳の部類に属しており、玄奘三蔵（六〇二～六六四）以前に成立したと思われる。^⑪

唐代以前の毘沙門天に関しては、未だに解明されていない部分が多く、断片的な資料でしか確認出来ないが、いずれにしても南北朝時代（四三九～五八九）には、既に毘沙門天が単独で存在していた痕跡がみられる。^⑫

『多聞天儀軌』が旧訳とされていることからこの南北朝時代辺りで成立したと筆者は考えているが、いずれにしても資料が少ないことからこれ以上の言及は困難を極める。

しかし、この儀軌がいつ頃どこで成立したのかを解明することにより、先に述べた唐代以前の毘沙門天について知ることができる可能性もあるだろう。

・儀軌の構成と内容

儀軌の内容に関しては、初期密教系の要素や道教の要素が含まれている箇所^⑬がみられ、非常に複雑な構造になっている。この『多聞天儀軌』中には、多種の成就法が説かれており、それがこの儀軌の最大の特徴でもある。

儀軌の構成は、各品に分類されており「畫像品一」・「作壇場品二」・「結界品三」・「手印品四」・「護身品五」・「廣大啓請品六」・「求使者品七」・「說天王真言品八」・「求一切成就法品九」の九品から成り立っている。

「畫像品一」では、毘沙門天を描く絵師について並びにその描き方、毘沙門天の像容について説かれている。

「作壇場品二」では、方壇について、その作る場所、作り方、方壇の莊嚴、その配置、そして作法をおこなう呪師について説かれている。

「結界品三」では、大願を唱えて結界をおこない、諸仏・諸菩薩や様々な神々を召集して、また五方藥叉を呼び、その心呪を唱えることにより結界が成就するという。

「手印品四」では、藥叉の印・羅刹の印・大歡喜王の印・大鬼縛の印及びそれぞれの真言について説かれている。

「護身品五」では、自身を擁護してもらうことを望むならば、五方藥叉と大輪金剛の陀羅尼を唱え、さらに天王（毘沙門天）の陀羅尼を唱えれば護身が成就されると説かれている。

「廣大啓請品六」では、毘沙門天の眷属である、二十八使者を招集する前におこなう所作について説かれている。そして使者を呼ぶ際には、その使者（鬼神）の名前を称して、諸々の供物を用意するという。

「求使者品七」では、二十八使者について説かれており、定められた所作をおこなうことにより、その諸々の使者

を自由に扱うことが出来るという。

「説天王真言品八」では、毘沙門天の真言について説かれており、その真言を唱えることにより、毘沙門天がその唱えた人物を擁護してくれるという。

「求一切利益品九」においては、毘沙門天の呪を用いた、様々な成就法が五六種説かれている。

二―二『北方真言』について

先にも述べている通り、『北方真言』は正式名『北方毘沙門天王随軍護法真言』と称し、不空三蔵（七〇五―七七四）によって翻訳されており、円行が日本へ請来している¹⁶。

その内容に関しては、初めに毘沙門天の根本呪が説かれており、次に毘沙門天の畫像法・作壇法と続き、毘沙門天がもたらす成就法が説かれている。最後に『四天王経』からの引用もみられる。

この『北方真言』は不空訳とされているが、円照（七八五―八〇四）が偏した『表制集』¹⁷にその名前を確認することができない。この儀軌は不空の名前を使った偽経であろう。

またその内容に関しても、漢訳表記が不統一であり、このことに関しては後に加筆されたと思われる。次にその一例として『北方真言』中に説かれている成就法の一つを記載する。

〈原文〉

又法若欲降伏諸国兵賊衆者。当画一像身卦紫磨真金甲。於浄室中焼衆名香乳頭薰陸香。諸色香花飲食供養。真心誦念天王真言十万遍。天王領天兵来助。他国兵敵自退散。若能昼夜誦念不絶。天王使太子独健。領天兵千人衛護不離其側。所求如意応念随心。皆得成就

又法若欲降前敵衆者。於浄室持斎画一天王形像。卦紫磨真金甲。於二丈竿懸。軍前五十步指其敵。其敵不能相

患²⁰

〈試訳〉

又の法、もし諸国の兵賊衆の降伏を望むならば、紫磨真金の甲冑を着せた像（毘沙門天）を画き、浄室の中で名香・乳頭・薫陸香を焼き、諸々の香花飲食で供養する。真心に天王真言を十万遍念誦すれば、天王が天兵を率いて助けに来る。他国の兵や敵は自ら退散する。もし昼夜途切れることなく誦念すれば、天王が太子の独健²²に天兵千人を率いて護衛させ、その側を離れることはない。求めるものは意の如く思いに応じて心にしたがって皆成就する。

又の法、もし敵衆を前もって降伏することを望むならば、浄室で持斎し紫磨真金の甲冑を着せた天王形像を画く。それを二丈の竿にかけ、敵軍の前五十歩の所でその敵を指せば、敵は災いをなすことができない。

この成就法は、怨敵退散または護国を意味する内容と思われる。尚、この成就法は『多聞天儀軌』中には説かれていない。

『北方真言』が成立したであろう唐代（六一八〜九〇七）では、毘沙門天信仰が流行っていた頃でもある。中国では、特に唐代から宋代（九六〇〜一一二六）にかけて盛んに信仰されてきたことが、すでに先行研究により示されている。²³

その代表者としてあげられる宮崎市定氏によれば、唐の玄宗代頃から毘沙門天が単独で寺院や軍宮等に祀られるようになるということを中国の正史類に基づいて指摘している。²⁴

また、唐代での信仰に関しては不空と毘沙門天が登場する説話もよく知られている。唐の天宝年中に安西城が敵国に囲まれた際、玄宗の命で不空が毘沙門天に祈願してその敵国を退けたという内容である。

次にその説話を記載する。

北方大毘沙門天王。唐天寶元載壬午歲。大石康五國圍安西城。其年二月十一日。有表請兵救援。聖人告一行禪

師曰。和尚安西被大石康□□□□國圍城。有表請兵。安西去京一萬二千里。兵程八箇月然到其安西。即無朕之。所有。一行曰陛下何不請北方毘沙門天王神兵應援。聖人云朕如何請得。一行曰喚取胡僧大廣智即請得。有勅喚得大廣智到内云。聖人所喚臣僧者。豈不緣安西城被五國賊圍城聖人云是。大廣智曰。陛下執香爐入道場。與陛下請北方天王神兵救。急入道場請。眞言未二七遍。聖人忽見有神人二三百人。帶甲於道場前立。聖人問僧曰此是何人。大廣智曰。此是北方毘沙門天王第二子獨健。領天兵救援安西故來辭。聖人設食發遣。至其年四月日。安西表到云。去二月十一日已。後午前。去城東北三十里。有雲霧斗闇。霧中有人。身長一丈。約三五百人盡著金甲。至西後鼓角大鳴。聲震三百里。地動山崩停住三日。五國大懼盡退軍。抽兵諸營墜中。並是金鼠咬弓弩絃。及器械損斷盡不堪用。有老弱去不得者。臣所管兵欲損之。空中云放去不須殺。尋聲反顧城北門樓上有大光明。毘沙門天王見身於樓上。

続けてその概要を記載する。

天宝元年に敵国五国に囲まれた安西から、二月十一日に京の玄宗皇帝へ救援の要請が届く。玄宗皇帝は安西城を救うために、一行の勧めで不空を招き毘沙門天に請禱させる。不空が眞言を唱えると、甲冑を纏った天兵たちが玄宗の前に現れた。不空によるとそれらは毘沙門天王の第二子獨健が天兵をつれて、安西へ救援に向かうために現れたのだということであったので、食事を設けて遣いに出した。その年の四月に安西から、二月十一日に城の東北方に金の甲冑をつけた兵士が現れたという報告があった。大きな音がして地面が揺れ山が崩れるということが三日続き、敵兵は自分の軍営に戻った。また、金の鼠が敵国の弓の弦を食いちぎり、敵国を退陣させ、逃げ遅れていた弱り年老いた敵兵を安西の兵が殺そうとすると、毘沙門天が城門の樓上に現れそれを諫めた。

この説話の中に「第二子獨健。領天兵救援安西故來辭」という記述があるが、似たような記述が『北方眞言』中にもみられる（先に記載した成就法中に傍線で示した箇所）。

もちろん、これだけで判断するのは難しいが、この説話の影響も『北方真言』が受けている可能性も否定できない。この説話自体もいつ頃成立したのか未明であること、また毘沙門天に関する研究もあまり進んでないためこれ以上の言及はできないが、『北方真言』は『多聞天儀軌』を抜き出し一部加筆し編纂された儀軌と思われる。そのことを確認するため次にこの二本の類似箇所である畫像法・作壇法・成就法と『多聞天儀軌』中の「畫像品」・「作壇場品」・「求一切利益品」を比較していく。

三、類似箇所の比較

『多聞天儀軌』中の「畫像品」・「作壇場品」・「求一切利益品」と、『北方真言』中に説かれている、畫像法・作壇法・成就法を比較していく。尚、比較していく際に『多聞天儀軌』を「多」、『北方真言』を「北」とそれぞれ表記する。また、「畫像品一」と畫像法、「作壇品二」と作壇法のそれぞれの比較に関しては原文を本論に記載するが、その際に異なっている箇所には傍線を引いて表していく。

三―「畫像品一」と畫像法

○「多」「畫像品一」

〈原文〉

身著七宝金剛莊嚴鉀胄。其左手執三叉戟右手托腰（又一本左手捧塔）其脚下踏三夜叉鬼。中央名地天亦名歡喜天。左辺名尼藍婆。右辺名毘藍婆。其天王面作可畏。猛形怒眼滿開其右辺画五太子及両部夜叉羅刹眷属。左辺画五行道天女及妻等眷属。⁽²⁸⁾

〈試訳〉

その身は七宝金剛（宝石）で裝飾された甲冑着け、左手には三叉戟を持ち右手は腰におく（別の本には左手で宝塔を捧げる）。その脚は三体の夜叉鬼を踏み、中央は地天または觀喜天・左は毘藍婆（夜叉）・右は毘藍婆（夜叉）という名前である。

天王の顔は恐ろしい形相にして、目を大きく開き怒っているようにする。天王の右には五太子、両部の夜叉羅刹等の眷属を画き、左には五行道天女及び妻等の眷属を画く。

○「北」畫像法

〈原文〉

七寶莊嚴衣甲。左手執戟稍。右手托腰上。其神脚下作二夜叉鬼。身並作黑色。其毘沙門面。作甚可畏形惡眼視一切鬼神勢。²⁹

〈試訳〉

七宝で裝飾された甲冑を着け、左手で戟（稍）を執り右手を腰におく。神の脚下に二体の夜叉鬼を作り（踏む）、その身を黒色にし、その顔は恐ろしく、すべての鬼神を睨みつける勢いを作る。

・持物

「多」では「三叉戟」と表記されているが、「北」では「戟稍」と表記されている。

・脚下の夜叉

「多」では「三夜叉鬼」を踏んでおりその三夜叉鬼については、中央を地天亦是歡喜天、左辺を毘藍婆、右辺を毘藍婆とそれぞれの名前が説かれている。一方、「北」では「二夜叉鬼」を踏むと説かれており、その夜叉（鬼）について詳細な記述はみられない。

・眷属について

「多」では、毘沙門天の両脇に五太子・夜叉・羅刹・妻等、様々な眷属を配置すると説かれている。一方、「北」では眷属については説かれてなく、毘沙門天を単独で配置すると思われる。

三―二「作壇品」と作壇法

○「多」「作壇場品二」

〈原文〉

八肘亦六肘八寸此是方壇。即簡勝地深掘一丈。出骨瓦石等惡物。別処取淨土堅築平正。乾已後便取黃土細攪。和白檀香末泥壇。削刮如鏡面即取米粉染五色。画克壇上作三隔院。当中央画一金剛火焰輪又一本云画一火珠光炎上出四角頭各各画十字形拔折羅。第二院中央画火珠火焰上出。東南面画三叉鉤戟西南面画一君遲。瓶口中著蓮華。西北面画一大螺。第三院中東面画獅子王。南面画龍王。西面画孔雀王。北面画夜叉王拄杖立地。又壇四角各各著一香水瓶。其瓶口中著雜輕菓子及花葉等。³⁰⁾

〈試訳〉

八肘または六肘六寸の方壇である。勝地（優れている土地）を選んで深く掘り、骨瓦等の惡物が出たなら別の場所を掘り淨き土を取る。それを堅く築き平にして乾かし、その後、黄土と白檀香末を混ぜて壇に塗り、形を整え鏡面のようにする。五色に染めた米粉の五色を用いて壇上に三隔院を画く。壇の中央（第一院）に金剛火焰輪を画く。別の本では、雄大な勢いを出させた火珠を画くという。

その四隅には、十字形拔折羅（羯磨金剛杵）を画く。

第二院の中央（東北面³¹⁾）には火珠、東南面には三叉戟、西南面に蓮華をおいた軍持、西北面に大螺をそれぞれ

画く。

第三院は、東面に獅子王、南面に龍王、西面に孔雀王、北面に杖を持ち地に立つ夜叉王をそれぞれ画く。またその四隅に雑軽菓子や花葉を入れた水瓶をおく。

○「北」作壇法

〈原文〉

作壇。於像前作八肘。牛糞塗地了。取香泥重塗了。以五色画作三重院。其壇内於中画一大輪。四角拔折羅十字安之。第二院内。東面画作一火珠火焰火出。南面画三股。又西面画一龍口中並出蓮華。北面画一大縲。第三院中東面更画獅子。南面画龍王。西面画孔雀王鳥。北面画羅刹手柱棒立地。壇四角各安香水瓶。内著雑菓楊枝。³²

〈試訳〉

像前に八肘の壇を作る。牛糞を地に塗り、香泥を取り重ねて塗る。五色で三重院を画いて作る。その壇の中央（第一院）に大輪³³、四隅に十字形拔折羅（羯磨金剛杵）を置く。

第二院内には、東面に火珠、南面に三股（三鈷杵）、西面に蓮華を置いた龍口、北面に大螺をそれぞれ画く。

第三院には、東面に獅子、南面に龍王、西面に孔雀王鳥、北面に杖を地に立たせた羅刹をそれぞれ画く。また、第三院の四隅には、雑軽菓子や楊枝³⁴を入れた香水瓶をおく。

・作壇法

「多」³⁵では、八肘亦は六肘八寸の方壇を勝地に作るという。浄き土を取って堅く築き整え、黄土・白檀香等を塗り形を整え、五色に染めた米粉を用いて壇上に三隔院を画くという作り方が説かれている。

一方「北」では、八肘の壇を毘沙門天像の前に作るという。地に牛糞を塗った後に香泥を塗る。そして三重院を敷く五色線も何を用いて敷くのか記されていない。簡略に説かれている。

・第二院

「多」では、「東南・南西・西北」（北東）に配置するかたちをとっている。一方「北」では、「東・西・南・北」に配置するかたちをとっている。また、「多」では西南面に「軍持」となっているが、「北」では西面に「龍口」と説かれている。

・第三院

「多」では、第三院の四隅に雑藁菓子や花葉を入れた水瓶をおくが、「北」では、雑藁並びに楊枝を入れた水瓶と説かれている。

三―三「求一切利益品九」と成就法

「求一切利益品九」中には、五六種の成就法が説かれており、次のように分類することができる。

- ①、人徳を求める成就法（敬愛）・・・・・・・・・・六種
 - ②、怨敵退散を求める成就法（降伏）・・・・・・・・六種
 - ③、擁護してもらう成就法（擁護）・・・・・・・・・・五種
 - ④、病氣治癒を求める成就法（息災）・・・・・・・・二三種
 - ⑤、その他の成就法（降雨、救済等）・・・・・・・・一六種
- 特に④の息災の成就法が最も多く説かれている。

次に「求一切利益品九」並びに「北」中に説かれている成就法を比較していくが、その方法として、「多」を基礎としてその試訳を載せ、そこに「北」で説かれている成就法の違い等を記載させていく形にする。（尚、異なった箇所が多い場合に関しては二本の試訳を記す。）

表記の仕方として、まず「○」「多」●「□□」とする。「●」には、「多」で説かれている成就法順に筆者が付した番号を記す。「□□」には、説かれている成就法の種類の名前を記す。また、二本中の成就法の数が膨大なので、試訳のみを本文に記載し、原文は脚注に記載する。

○「多」一〈その他〉

「多」では、王の願いを求めるなら、赤小豆一〇八顆を取り、一つ一つまじない火中に入れて焼き、一〇八遍に満たせば、大王（毘沙門天）が人を遣えて呪師を矢の如く早急に呼びにくるという成就法が説かれている。³⁷⁾

「北」では、行者、王の愛敬を得たいと望むならば、赤小豆を取り一つ一つまじない火中に投げて焼き、一〇八遍に満たせば、その王は人を遣わしてたちまちに（行者）を呼びにくるという。王から寵愛されるためのいわゆる敬愛の成就法が説かれている。³⁸⁾ 方法は同じである。

○「多」二〈敬愛〉

「多」では、大官人から敬ってもらうことを求めるなら、白芥子を一〇八顆取り、一つ一つまじない火中に入れて焼き、一〇八顆に満たせば大官は、仏のように大いに歓喜し、（呪師を）敬うという成就法が説かれている。³⁹⁾

「北」も同じ成就法が説かれているが、「多」では「敬重」と説かれている箇所が「北」では「愛敬」と説かれている。また「其官即自来敬仰大喜」という記述もあり、官人は自ら来て大いに喜び敬うと説かれている。⁴⁰⁾

○「多」三〈敬愛〉

もし、大官家の婦人等（親族）が来て、恭敬する（敬ってもらう）ことを求めるならば、蟻子土を取りの檀香水と混ぜて泥丸を一〇八顆作り、一つ一つまじない火中に入れて焼き、一〇八顆を満たせば、その家より人を遣わせ

て呪師を問うために来る。まさに、物が必要ならば、それを渡して、決して違惜してはならない。あるいは、自分自身がきて、呪師を恭敬する。もし、未だ呪師が見えない場合は、心に常に臆念（⁴¹ 思う）するという成就法が説かれている。「北」には説かれていない。

○「多」四〈敬愛〉

もし、すべての人家の恭敬（敬つてもらふこと）を求めるならば、苦楝子（⁴²）を一〇八顆取り、一つ一つまじない火中に入れて焼き、一〇八遍を満たせば、人家の者がまるで父母と親しむかのように呪師を恭敬するために来るといふ成就法が説かれている。「北」には説かれていない。

○「多」五〈降伏〉

もし、怨家（⁴³）を伏せることを求めるならば、菖蒲根（⁴⁴）を取り一〇八遍まじない、終わつたならばそれで自身の顔をなでて口に含めば、その怨家を伏せることができるという成就法が説かれている。「北」には説かれていない。

○「多」六〈降伏〉

「多」、悪人がいて、呪師を相悩させる（悩ませる）ならば、心に多聞天の形状を念じ呪を一遍唱えれば、悪人は行動することができなくなるといふ成就法が説かれている。⁴⁵

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「多」では、多聞天を心に念じるが、「北」では、「心中想此呪神形」と記述されており、心に神を念じると説かれている。⁴⁶

○「多」七〈その他〉

もし、放捨⁽⁴⁶⁾を望むならば、即ち念しながら放捨すれば、その人は以前のようにもとに戻るという成就法が説かれている。⁽⁴⁷⁾「北」には説かれていない。

○「多」八へその他

「多」では、怨家と同じ郷坊（集落）に住みたくなないと望むならば、苦棟木一〇八子または櫛子⁽⁴⁸⁾を取り、一つ一つまじない火中に入れ、それを一〇八遍おこなえば、その悪人と一緒に住むことはないという成就法が説かれている。⁽⁴⁹⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、用いる供物は「苦棟木」のみである。⁽⁵⁰⁾

○「多」九へ擁護

もし、諸天大いに歓喜して、擁護をしてもらうことを求めるならば、蘇蜜及び菓子を取り、一〇八遍まじない火中に入れて焼けば、すべての諸天は、皆大いに歓喜し擁護するという成就法が説かれている。⁽⁵¹⁾

「北」でも同じ成就法が説かれているが、「多」では最初に「若求諸天大歓喜擁護者」という記述がされているが、「北」では省略されている。⁽⁵²⁾

○「多」一〇へ擁護

「多」では、遠行したいことを望むならば、穀木の杖⁽⁵³⁾をまじなって行けば、すべての難處は安らかなり、障礙はないという成就法が説かれている。⁽⁵⁴⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、最初に「又法」と記述されており、「多」には記述されていない。またその効果に関して、「多」では難處は安らかになると説かれているが、「北」では「悉得無怖」と記述され

ており、悉く怖いことはないと説かれている⁽³⁸⁾。

○「多」一一〈敬愛〉

「多」では、一切人の愛敬を求めるならば、胡麻を取り、一〇八遍まじない火中に入れて焼けば、すべての人は（あなたを）尽きることなく恭敬するために来るという内容の成就法が説かれている⁽³⁹⁾。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「多」では、「若求一切人愛敬者」と記述されている箇所が、「北」では「又法」と省略されている。また「北」では「一切人尽來供養呪師」と記述され、すべての人は呪師を供養しに来てつきることはないと説かれている⁽⁴⁰⁾。

○「多」一二〈擁護〉

「多」では、山に入つてすべての惡禽獸及び諸の惡賊から逃れたいと望むならば、白芥子一〇八顆を取つて、一つ一つまじない火中にいれて焼いて、それを山中に撒けば、そのすべての惡禽獸はすべて身を隠し、またすべての惡賊もあらわれることはないという成就法が説かれている⁽⁴¹⁾。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「多」では、「若欲入山離一切惡禽獸及諸惡賊者」と記述されているが、「北」では「又法」と省略されている。また、成就法の効果についてもすべての惡獸はその人を傷つけることはないという。また、狩人も自ら地に伏して傷害をあたえることはないと説かれている⁽⁴²⁾。

○「多」一三・一四〈その他〉

「多」では、雨が降ることは望むならば、杏仁一〇八顆を取り、一つ一つまじなうこと二一遍おこない終わったなら、龍の潜む池の中におけば、雨が降るといふ成就法が説かれており、次に雨を止めることを望む時は、梧子⁽⁴³⁾を

一つ取ってまじない火中に入れて焼けば、雨は止むという成就法が説かれている。⁽⁶⁶⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、雨を降らす際に供物として「杏子」を用いている。また、「多」の場合は、「降らせる」、「止める」と、二つに別けて成就法が説かれているが、「北」では、一つの流れとして説かれている。⁽⁶⁷⁾

○「多」一五へその他

「多」では、食を求める時は、鉢を一〇八遍まじなえば、様々な場所から自然に飲食を得ることができるという。⁽⁶⁸⁾もし、あまりを喫したら、自然と飲食が消えるという。⁽⁶⁹⁾もし、更に食が必要ならば、至心に鉢に向かって一遍呪まじなえば、即ち（先ほど食べた）飲食が、すべてもとに戻り満足するという成就法が説かれている。⁽⁷⁰⁾

「北」では、行者食べ物を望むならば、まず鉢を一〇八遍まじなえば、随所から自然と一切の飲食が得られるという。食べ終わって飲食を残しても自然と（飲食が）消えるという。また至心に鉢を一遍まじなえば飲食が鉢の中にあらわれるという成就法であり、「多」と同じ内容が説かれている。⁽⁷¹⁾

○「多」一六へその他

「多」では、功德天女を見ることを望むならば、まさに一日一夜食（夕飯）を食べないで、佛前で蘇合香を焼いて及び白花を一〇八遍まじなって佛前に撒く。功德天女は姿を現して、その呪師の求めるすべての財寶を得ることができ、すべての事を知ることが出来るという成就法が説かれている。⁽⁷²⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「多」では「功德天女」の箇所が、「北」では「功德天」と説かれている。

○「多」一七〈降伏〉

「多」では、すべての鬼神を避けることを望むならば、白芥子を一把及び蘇を取って、それぞれを一つ一つ一〇八遍まじない、火中にいれて焼けば、すべての悪神を伏せることができるという成就法が説かれている。⁷⁷

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「一切悪神無不伏也」という効果に関する記述がなく略されている。

○「多」一八〈その他〉

「多」では、悪人がいて三寶所において不善心を起こして、頻りに現れて悩乱⁷⁹させるなら、自手を二一遍まじない、彼の悪人の名字（名前）を称して、その身（悪人の身）を打てば、その悪人は、善心をおこして悩乱しに來ない。改めることを望むならば、呪師は慈心をおこして、悪人の前に向かって一遍呪を唱えれば、還復してもとに戻る（悪人にならない）という成就法が説かれている。⁸⁰

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、不善心をおこすのが「官人」と説かれている。また、呪の回数も「多」では二十一遍、「北」では三十一遍と、回数が異なっている。

○「多」一九〈降伏〉

もし、悪人を降伏させたいと望むならば、蘇酪を一〇八遍呪まじない火中に入れて焼けば、その悪人から恭敬の心が生まれるという成就法が説かれている。⁸²「北」には説かれていない。

○「多」二〇〈敬愛〉

「多」では、すべての人から恭敬されることを望むならば、土を取り三七遍⁸³まじない、自身の上に撒けば、すべ

ての人に敬われるという成就法が説かれている。⁽⁸⁴⁾

「北」でも同じ内容の成就法⁽⁸⁵⁾が説かれているが、「多」では「若欲求一切人恭敬者」という記述されている箇所が、「北」では「又法」と記述されており省略されている。

○「多」二一〈その他〉

「多」では、自らの大威徳⁽⁸⁶⁾を望むならば、墨をまじない額につければ、すべての人が敬愛するという成就法が説かれている。⁽⁸⁷⁾

「北」でも同じ内容の成就法⁽⁸⁸⁾が説かれているが、「多」で「大威徳」と説かれている箇所が、「北」では「威光」と説かれている。

○「多」二二〈敬愛〉

「多」では、大福徳⁽⁸⁹⁾の人が来て、恭敬することを求めるならば、まさに灰を取って二一遍呪して、自身の上に塗って大衆（の中）に入れば、すべての人が見て、皆歡喜するという成就法が説かれている。⁽⁹⁰⁾

「北」でも同じ内容の成就法⁽⁹¹⁾が説かれているが、「多」では、まず「若求大福徳人来恭敬者」と記述されているが、「北」では、省略されている。また、「多」では「一切人見皆歡喜」と記述されているが、「北」では、「一切人見皆福徳相衆人供養」と異なる記述されている

○「多」二三〈擁護〉

「多」では、遠行し悪獸の被害に遭わないことを求めるならば、自分の左手をまじなって拳⁽⁹²⁾を作れば、一つも妨礙されることはないという成就法が説かれている。⁽⁹³⁾

「北」では、遠出の際道中で悪人悪狩の傷害に遭遇せず、勢いよく（順調に）行けることを望むならば、左手の四指で大母指を握り印を作りまじなえば、どの道を通ればよいのか見分けることができるという内容の成就法⁹⁴が説かれている。また「北」では「行加（如）奔馬⁹⁵」とあるが、「多」にはこの記述はされていない。

○「多」二四〈息災〉

「多」では、童男童女の鬼病⁹⁶の原因を知りたいと望むならば、泥で夜叉を作り鏡前に置き、一〇八遍まじない、その病人に質問すれば、病人は自ら神鬼（取り憑いた鬼魅）の名をいうという成就法が説かれている⁹⁷。

「北」では、童子童女をまじない吉凶を問えば、その人自ら病氣の名を語りだし、その病氣について知ることができるという成就法⁹⁸が説かれており、「多」の成就法の途中から記述されたかたちのように思える。また「北」では病の原因を「吉凶」と説かれている。方法も「呪」としか記されていない。「多」の成就法の記述を「北」ではかなり省略している。

○「多」二五〈息災〉

「多」では、人がいて蠱毒⁹⁹が著けば、水を三七遍まじなえば、その毒虫は自然に出て来るという成就法が説かれている¹⁰⁰。

「北」では、食べて蠱毒が著けば、食物を二一遍まじなえば、毒を吐き出すという成就法¹⁰¹が説かれている。

「多」では、「若有人著蠱毒者」と記述されているが、「北」では、「若被蠱毒食者」と記述されている。また、治療法として「多」では、水を用いているが、「北」では、食物をまじなえば、毒を吐き出すと説かれている。

○「多」二六〈息災〉

もし、人がいて鬼病を患ったならば、五色の線を三七遍まじない三七結（結び目）を作り、病人の項の上に結び、その病は除かれるという成就法が説かれている。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「北」では、「五色線。一遍一結一百八遍」と表記されており、五色線のまじなう回数と結ぶ回数が異なっている。また、五色線を繋る箇所に関しては、「北」では頭上又は項上・臂上となっている。

○「多」二七へ息災

「多」では、心痛を患う者がいれば、石榴の汁を取り三七遍まじない、病人に与えて飲ませれば、病は癒える。あるいは石榴の枝をまじないその病人を打てば、また病は癒える。あるいは黄土を心上に塗れば、病はたちまち治るといふ成就法が説かれている。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、病を治す方法として、「多」では「石榴汁」・「石榴枝」・「黄土」の三つの素材を用いるが、「北」では、「石榴花汁」を用いた方法しか説かれていない。

○「多」二八へ息災

「多」では、野狐の病を患ったならば、五色線をまじない童女に縄を合わせて、一〇八遍まじないその項上に繋げて、更に楊枝をまじない病人を打てば病は癒えるという成就法が説かれている。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、病名を「狐魅病」と記述されており、治療法も五色線を童子に合わせ、それを一つまじない結び目一つ作ること一〇八遍おこない、そしてそれを病人の「項下」に繋げると説かれている。

○「多」二九〈息災〉

「多」では、腰及び骨節の病を患ったならば、一椀の浄水及び鑢鐵刀⁽¹⁰⁾を加持し一〇八遍まじない、その痛處（痛い處）に塗れば癒えるという成就法が説かれている。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、病を「骨節楚病」としており、治療法では「鑢鐵刀」だけを用いている。まじなう回数は表記されていない。

○「多」三〇〈擁護〉

「多」では、自身及びその同伴者を護ってもらうことを望むならば、白芥子の灰及び水を取り、二一遍まじない四方に撒けば、自身と同伴者は護られ、安樂を得るという成就法が説かれている。

「北」では、護身を望むならば、白芥子を二一遍呪す。灰と水も同じくおこない、四方に散らせば界を為すという成就法（結界法）が説かれている。

○「多」三一〈息災〉

もし、癰腫⁽¹¹⁾を治したいと望むならば、白檀香を取り一〇八遍呪まじないその癰腫の上に塗れば癒えるという成就法が説かれている。「北」には説かれていない。

○「多」三二〈息災〉

「多」では、頭痛あるいは半身が痛むならば、蘇と烏麻油⁽¹²⁾を二一遍まじない、その痛處に塗れば、痛みが除かれ癒えるという成就法が説かれている。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、病に関しては「若頭病或身病」と説かれている。

○「多」三三〈息災〉

「多」では、腫を患ったならば、舍利塔の前で石榴黄と壇香を一〇八遍まじない、その腫の上に塗れば、腫は除かれて癒えるという成就法が説かれている。⁽¹⁸⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、治癒をおこなう場所について説かれていない。

○「多」三四〈息災〉

「多」では、耳風⁽¹⁹⁾を患うものがいれば、蘇を三七遍まじない、病人に与えて食べさせれば癒えるという成就法が説かれている。「北」でも同じ内容の成就法が略されて説かれている。

○「多」三五〈息災〉

「多」では、人がいて頭頂⁽²⁰⁾を患ったならば、大黄を三七遍まじない、痛處に塗れば癒えるという成就法が説かれている。⁽²¹⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、塗る箇所に関して「額上」と説かれている。

○「多」三六〈息災〉

「多」では、人がいて赤眼を患ったならば、大黄を二一遍まじない、その額上に塗れば癒えるという成就法が説かれている。⁽²²⁾

「北」では、眼を患ったならば、杏人油をまじない塗れば癒えると説かれており、用いる供物（薬）が異なっている。また塗る場所が説かれていない。⁽²³⁾

○「多」三七〈息災〉

「多」では、人がいて氣病を患ったならば、青木の香末を二一遍まじない、水と混ぜて服用すれば癒えるという成就法が説かれている。⁽¹³⁾「北」でも同じ内容の成就法が略されて説かれている。

○「多」三八〈息災〉

「多」では、人がいて瘡疥及び癰病を患ったならば、藜蘆末を三七遍まじない、油と混ぜてその病の上に塗れば癒えるという成就法が説かれている。⁽¹⁴⁾「北」でも同じ内容の成就法が略されて説かれている。また用いる供物として「利蘆末」と説かれている。

○「多」三九〈息災〉

「多」では、人がいて疫病及び瘡病を患ったならば、楊枝を二一遍まじない、その病人に把行させれば癒えるという成就法が説かれている。⁽¹⁵⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、病名は「瘡病」のみである。また治癒法に関しては「令打病人」と説かれており異なっている。

○「多」四〇〈息災〉

「多」では、人がいて蛇に咬まれたならば、畢撥を三七遍まじない散らし、その咬まれた處に塗れば癒えるという成就法が説かれている。⁽¹⁶⁾「北」でも同じ内容の成就法が略して説かれている。また用いる供物として「畢撥枝」と説かれている。

○「多」四一〈息災〉

「多」では、人がいて蝸に螫されたならば、乾脯⁽¹⁸⁾をまじない火中で燃焼させ、その痛處に貼へれば癒えるという成就法が説かれている。「北」でも同じ内容の成就法が説かれている。

○「多」四二〈息災〉

「多」では、婦人がいて乳腫を患ったならば、油麻を三七遍まじない、痛處に塗れば除かれるという成就法が説かれている。「北」でも同じ内容の成就法が略して説かれており、呪の回数も説かれていない。

○「多」四三〈息災〉

「多」では、婦人の帶下病⁽¹⁹⁾は、香水を三七遍まじない、服用すれば癒えるという成就法が説かれている。「北」でも同じ内容の成就法が略して説かれており、呪の回数も表記されていない。

○「多」四四〈息災〉

「多」では、人がいて鬼氣を患って狂言癲走するならば、水を三七遍まじない、その人に服用させれば癒えるという成就法が説かれている。「北」でも同じ内容の成就法がとかれているが、「若人卒被鬼著狂言荒語」と説かれている。また呪の回数が表記されていない。

○「多」四五〈息災〉

「多」では、人がいて心痛を患ったならば、黄土を二一遍まじない、その痛處に塗れば癒えるという成就法が説かれている。「北」でも同じ内容の成就法が略して説かれている。

○「多」四六〈息災〉

「多」では、人がいて鬼魅の病を患ったならば石榴の枝を一〇八まじない、病人を打てば癒えるという成就法が説かれている。⁽¹⁵⁾「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「一切鬼魅」と説かれている。

○「多」四七〈その他〉

もし、人がいて婦人の愛念を得たいと望むならば、土を三七遍まじない自身に撒けば、その人は日夜思い続けるという成就法が説かれている。⁽¹⁶⁾「北」には説かれていない。

○「多」四八〈敬愛〉

もし、婦人が自ら恭敬しに現れることを望むならば、常に呪を二一遍唱えて、灰をまじない自身に撒けば、その婦人は日夜、常にその人を思つて死にたいと思ひ、もし顔を見ることができれば死んでもよいと思ひ、その人をあわれんで死にたいと思うようになるという。⁽¹⁷⁾「北」には説かれていない。

○「多」四九〈その他〉

もし、夫婦が各自離れて遠ざかること（離婚）を望むならば、粳米を取り、三七遍まじないその夫婦の身に撒けば、すぐにお互いに去っていき相擾を犯すことはないという成就法が説かれている。⁽¹⁸⁾「北」には説かれていない。

○「多」五〇〈その他〉

もし、夫婦がお互いに憎み合い、和会したいと望むならば、天王像の前に壇を作り、壇内に夫婦（の形）を描いて、種々の飲食をもつて天王像に供養して白芥子及び菖蒲根末を取り丸（丸香）を三二一個作る。一つ一つまじな

い、その夫婦の姓名を言えば、自然に和睦し、さらに別心することはないという成就法が説かれている。⁽¹⁰⁾「北」には説かれていない。

○「多」五一〈その他〉

「多」では、山間にある阿修羅の窟を知りたいと望むならば、白芥子を取り自身の血と混ぜてまじない、(自身に) 打つことを一〇八〇遍おこなえば、山窟は自ら開くという。

そして、火が燃えるかのように(勢いよく) 修羅女が出現し、種々の香華を持って呪師のところにやって来て、それらを取らせるという。

もし呪師、この窟内に入ったならば、寿命が非常に長くなり、身体能力も阿修羅のようになり、また金剛のようにもなり(そこに入ることに対して) 損するものはいないという。

もし、(窟を) 出たいと望む時は、修羅女が随従し、送り出してもらえれば、本處に戻る(元の場所に帰れる)という成就法が説かれている。⁽¹¹⁾

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「多」では呪師に花を取らせるが、「北」では花を持って呪師を迎えに来るという。

○「多」五二〈その他〉

「多」では、身を隠すことを求めるならば、この天王像をもって、舍利塔の前において香泥を地に塗り種々の香華をもって壇内に撒き、また種々の飲食をすべて用いて天王像に供養して、おわったなら梨木を取り合子⁽¹²⁾を作り、安悉香・善那石を取って各の末(末香)を作り、秦膠水と混ぜて丸香を作り、合子の中に盛って壇上におく。

行者は、一対の新淨衣を作り、洗浴して衣を着て天王像の前に座って、一日何も食わず、この呪を一〇〇八遍唱

えておわったなら、勞せずして三事相が現れる。ただ一〇八遍唱えおわったなら、眼上に塗り、また脚・掌・心胸の前・両膊の上に塗りおわったなら、合掌して至心に思念する。自身は、虚空のようであり自身はあることがない（存在しない）と。この想を作る時、行者は隱身を得ることができ、日に行くこと千里、すべての事業が成就するという成就法が説かれている。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、「若求隱身者」の箇所が「又法」と説かれている。

○「多」五三〈降伏〉

「多」では、外道を降伏し、及び自身が火に焼かれないことを望むならば、自身の血を取り魚血と相和させ、瞋心に呪を三七遍唱えて火中に投げれば、一食頃の間、火に自身は焼かれないという成就法が説かれている。「北」でも同じ内容の成就法が説かれている。

○「多」五四〈降伏〉

「多」では、外道を降伏するには、前の身印を結びながら瞋心を作り、心の中で呪を一〇八遍唱えれば、すべての外道のあらゆる法術は破壊されて成就しないという成就法が説かれている。

「北」でも同じ内容の成就法が説かれているが、印について「手中結印」と説かれている。

○「多」五五〈息災〉

もし、ピナーヤカ等のすべての鬼病を除くには、安悉香を焼き大瞋の心を作って、急々に呪を唱えて、石榴子を取って病人を打てば、そのすべての鬼病・天疫・龍疫は自然に消滅する。

また、もし未だに作法をしていないならば、その病人は、或は歌い、或は笑い、或は座り、或は走る（狂乱する）。

もし、大力鬼去った後、銅娑羅の中に水を入れて灰麴と混ぜて、門外に撥瀉^⑭して、おわったならば、その病人は狂乱しなくなり、さらに銅娑羅の中に灰を盛り、灰の中に白華をおけば、病は治るといふ成就法が説かれている。
「北」には説かれていない。

○「多」五六へその他

また、穢を解くには、まず壇を作る。牛糞を壇に塗る。（壇は）四角と円で大きさは各々方円を二肘にする。一童子を取って、浄潔洗浴し新しい白淨衣を着て、壇上に蹲座する。童子の両手脚を娑羅の上で捻って、安悉香を焚いて童子の身を薫らして、呪を唱えれば、即ち娑羅が動いて、童子は、自ら賊のある處を示すといふ成就法が説かれている。^⑮「北」には説かれていない。

二本に説かれている成就法と成就法について比較してきた。字の違いや、用いる供物に一部違いがみられる。また、「多」中に説かれている成就法を簡略している箇所や幾つかの成就法を一つにまとめて説いた箇所が「北」中の成就法にはみられる。

以上、『多聞天儀軌』『畫像品』・「作壇場品」・「求一切成就法品」並びに『北方真言』中に説かれている畫像法・作壇法・成就法について比較検討して来た。この二本の類似箇所を比較すると、やはり『多聞天儀軌』の方が、その構成が整えられており、また内容に関しても詳細に説かれている。

四、まとめ

本稿では、『多聞天儀軌』並びに『北方真言』の二つの儀軌について取り上げてきた。この二本に関しては、類似箇所があることから『佛書解説辞典』によれば同本異訳という指摘がされている。

しかし、この二本の原本に関しては未発見であること、更に『多聞天儀軌』の翻訳者（撰述者）である般若斫羯羅は「智慧輪」とも「般若輪」とも訳すことができ、智慧輪という人物も実在するが『多聞天儀軌』の訳者とは別人である。また空海の『御請来目録』中に、「般若輪三蔵」と記されていることから、『多聞天儀軌』の翻訳者（撰述者）に関しては、「般若輪」と訳すと思われる。

また、『北方真言』中には唐代で流行った毘沙門天の影響を受けて加筆されたと思われる成就法も説かれている。

これらのことを踏まえて次に、この二本の類似箇所である『多聞天儀軌』「畫像品一」・「作壇場品二」・「求一切利益品九」並びに『北方真言』中の畫像法、作壇法、成就法をそれぞれ比較し考察してきた。その結果、全体として『多聞天儀軌』の方が、その構成が整えられており、また内容に関しても詳細に説かれていることが確認できた。しかし『多聞天儀軌』に関しては、先にも述べている通り複雑な内容であり、『御請来目録』では旧訳の部類に属しているという。唐代以前の毘沙門天信仰に関しては不明な部分が多いことを踏まえて、これらの事については、更なる考察が必要と思われる。

また、今回この二本について類似箇所を比較してきたが、先にも述べている通りこれらの儀軌に関しては、その原本が未発見であり更に毘沙門天経軌類に関する研究も未発達であり、残念ながら断定はできないが、いずれにしても『北方真言』に関しては上記のことを踏まえ考慮するなら『北方真言』は『多聞天儀軌』中の類似箇所を抜粋し、また当時中国で流行っていた毘沙門天の影響を受け加筆され編纂された儀軌と思われる。

（大正大学大学院博士後期課程）

- (1) 大正藏21 No.1246
正式名である『摩訶吠室羅末那野提婆喝羅闍陀羅尼儀軌』は、サンスクリット語を音写して漢字で表記されたものである。これを翻訳して『多聞天陀羅尼儀軌』、または『多聞天儀軌』という。本儀軌のサンスクリット語での名称は、音写から推測して mahāvaiśṛavāṇadevarājadharaṇīvidhi とした形であったと考えられる。
- (2) 大正藏21 No.1248
- (3) 大正藏55 No.2154
- (4) 大正藏55 No.2156
- (5) ・『毘沙門天王經』一卷 不空訳 (大正藏21 No.1244)
・『仏説毘沙門天王經』一卷 法天訳 (大正藏21 No.1245)
・『摩訶吠室羅末那野提婆喝羅闍陀羅尼儀軌』一卷 般若斫羯羅訳
・『北方毘沙門天隨軍護法儀軌』一卷 不空訳 (大正藏21 No.1247)
・『北方毘沙門天王隨軍護法眞言』一卷 不空訳
・『毘沙門儀軌』一卷 不空訳 (大正藏21 No.1249)
・『北方毘沙門多聞寶藏天王神妙陀羅尼別行儀軌』一卷 不空訳 (大正藏21 No.1250)
・『吽迦陀野儀軌』三卷 金剛智訳 (大正藏21 No.1251)
大正藏に収録されている八本中、五本が不空訳とされているが、このことに関しては不空の名を使った疑經であるという見解がなされている。
- ・松本文三郎『兜跋毘沙門天攷』(1939年『東方學報』京都第十冊第一分)
- ・長部和雄『唐代密教史雜考』(1990年)
- (6) 『弘法大師全集』第一輯
- (7) 『根本大和尚眞跡策士等目錄』[大正藏 Vol.55 No.2162]・小野塚幾澄『空海教学における背景思想の研究・資料篇』
- (8) 『真言宗諸學經律論目錄』(『弘法大師全集』第一輯)
- (9) 『佛書解説大辞典』第十卷
- (10) 智慧輪の生没年については、明らかではない。しかし、入唐僧の宗叡(八〇九〜八八四)並びに円珍(八一四〜八九一)と関わ

りがあることから、智慧輪は八〇〇年代前半ぐらいに生まれ活躍したと思われる。(宗叡の入唐期間は、八六二〜八六五年。円珍は、八五三〜八五八年である。)

『弘法大師著作全集』第二卷 p.17

・今井淨圓「智慧輪と法門寺」(2002年『密教学研究』34p.12)

(11) 『或^レ近^ク譯^{シテ}未^レ傳^ニ、此^ノ問^ニ。或^ハ舊^ク譯^{シテ}名^ハ來^リ實^ニ闕^{ケタリ}。古人^ノ所^レ未^ダ傳^ヘ、略^ハ在^リ斯^ノ中^ニ。』(『弘法大師全集』第一輯 p.87)

(12) 僧祐(四四五〜五一八)の『出三藏記集』(大正藏55 No.2145)中には、「毘沙門王經」卷一(大正藏55 No.2145 p.33)とていう記述がみられ、梁代(五〇二〜五五七)には毘沙門天が単独で經典に説かれていたことがうかがえる。尚、『出三藏記集』卷四の「失訳経録」中に表記されており、この經典を残念ながら確認することができない。

また北魏代(三八六〜五三四)においても、すでに単独で存在していた形跡が残っており、敦煌出土經典類の奥書に記されている。(梅季坤 胡穎『敦煌願文集』1995年)

【大方等大集經元太榮題記願文】

大代大魏 永熙二年五月七日、清信士使持節散騎常侍開府儀同三司都督嶺西諸軍事驃騎大將軍瓜州刺史東陽王 元太榮、自惟福助微淺、每嬰繼志(重患)〔一〕、無方自救。仰恃天王發誓之重、仰爲比沙門天王敬造《大集》一部十卷、《法華》一部十卷、《維摩》一部三卷、《藥師》一部一卷、合廿四卷。觀(願)〔二〕天王成佛、弟子所患永除、四體休寧。所願如是。

(『敦煌願文集』p.822)

【大般涅槃經元太榮題記願文】

大代魏 永熙二年七月十三日、清信士使持節散騎常侍開府儀同三司都督嶺西諸軍事驃騎大將軍瓜州刺史東陽王 元太榮、敬造《涅槃》、《法華》、《大雲》、《賢愚》、《觀佛三昧》、《祖持》、《金光明》、《維摩》、《藥師》各一部、合一百卷、仰爲比沙門天王。願弟子所患永除、四體休寧。所願如是。

(『敦煌願文集』p.823)

これらの奥書によれば、北魏(永熙)代に瓜州刺史である東陽王元太榮に『涅槃經』・『法華經』・『金光明經』等の様々な經典を多数、息災延命を祈願して毘沙門天のために造經(写經)させたと記されている。(榎一雄編『講座敦煌』二 敦煌の歴史)

・松本榮一「兜跋毘沙門天圖」(1937年『敦煌画の研究』)

・佐藤有希子「敦煌の毘沙門天像―石窟内壁画における位置と圖像の関連性―」(2008年『朝日敦煌研究員派遣制度記念誌』)

(13) 初期密教的な要素については、本論で取り上げる「畫像品一」・「作壇場品二」・「求成就法一切品九」中にみられる。

また道教的要素に関しては「結界品三」中にみられる。太字であらわしていく。

法界一切諸仏菩薩。金剛密跡力士一切諸善神王。天神王地神王山林河海日月五星二十八宿。閻羅法王五道將軍太山府君司命司録。怨家債主冥官業道行病鬼王毘首羯摩天子。五方藥叉大將三天童子七星七宿日月天子。難陀跋難陀和修吉等諸大龍王皆悉証知。〔中略〕又別請五方龍王四大天王二十八部諸鬼神。又別請五方藥叉衆。

(大正藏21 No.1246)

この箇所では様々な仏菩薩、その他の多種多様な神々の名前があげられているが、太線で記した箇所は、「閻羅法王・五道將軍・太山府君・司命・司録・怨家債主・冥官業道・行病鬼王」という神々の名前であり、道教の神々のことであると思われる。

先須謹請五方藥叉。東方青帝藥叉。身長三丈二尺口吐青氣南方赤帝西方白帝北方黑帝中央黃帝等。身長亦同青帝吐氣依方。

吐并請眷屬

(大正藏21 No.1246)

この「東方青帝、南方赤帝、西方白帝、北方黑帝、中央黃帝」とは、五帝と言われており、道教で奉仕する五体の神であるという。

(14) この「畫像品一」中には、「廣如大經說」という記述があり、このことから『多聞天儀軌』には基となった経典が存在するといふことがうかがえるが、その経典に関しては不明である。

(15) 讀誦使者・論義使者・聰明多智使者・伏藏使者・說法使者・龍宮使者・隱形使者・禁呪使者・奇方使者・博識使者・勝方使者・興興生求利使者・田望利使者・高官使者・右司命使者・左司命使者・北斗使者・五官使者・太山使者・金剛使者・神通使者・坐神使者・多魅使者・神山使者・香王使者・自在使者・大力使者・持齋使者

(16) 『靈巖寺和尚請來法門道具等目錄』[大正藏55 No.2164]・『諸阿闍梨眞言密教部類總錄』[大正藏55 No.2176]

(17) 大正藏52 No.2120

(18) 例えば、儀軌の題でも用いられている「眞言」という語は、サンスクリット語の「dharani」の意識であるが、この語を旧訳で訳すと「呪」、新訳で訳すと「眞言」という。『北方眞言』では(特に成就法)この両方の言葉が用いられている。

(19) 『北方眞言』中の畫像法の最後に「其塔奉釈迦牟尼仏。教汝若領天兵守界擁護国土。何護吾法。即擁遣第三子那吒捧行莫離其側。汝眼毒惡恐損衆生。」と説かれており、毘沙門天の捧げる宝塔に関することと思われるが、ここで説かれている像容は宝塔を捧げていない。前後の文に合わないことから、この記述も後に加筆された可能性が考えられる。尚、『多聞天儀軌』中にはこの記述はみられない。

また、ここで説かれている「那吒」とは、毘沙門天の第三子であり道教の神ともいう。『封神縁起』等に登場する。

- (20) 大正蔵21 No.1248 p.227
- (21) 紫色を帯びた純粹の黄金
- (22) 毘沙門天の二番目の子供
- (23) 松本前掲

・宮崎市定「毘沙門天信仰の東漸に就き」(1941年『宮崎市定全集』19 1992)

・頼富本宏『中国密教の研究』(1979年)

・神田雅章「城門楼上の毘沙門天について——東寺兜跋毘沙門天立像の羅城門安置をめぐって——」

(1995年『美術史学』16)

- (24) 『宋の嘉定赤城志』卷三十一に、州治の後に天王堂あり、唐の天寶の初に建つと記されており、淳熙三山志卷三十三には福州、古田県の大吉山資聖院は天寶六載僧尚志なる者が、天王院を創めしに起るといい、次で通鑑卷二二二肅宗上元二年の胡註に薊門紀乱なる書を引き、…(以下略) (宮崎 p.57)

『淳熙三山志』卷三十六

大吉山資聖院和平里天寶六載僧尚志自郢州來翔號天王皇朝大中祥符八年勅戒天王資聖禪院舊産錢一貫八百五十文

(四庫全書 484 p.541)

『資治通鑑』卷二二二

通儒將入潜令康孝忠從數十人持兵詣飲虛馳取其馬関於城毘沙門神之院

(四庫全書 309 p.113)

頼富氏によれば、唐末から五代にかけては、とくに戦争に関する神格として武人を中心に尊崇を集めていたことが『旧五代史』などの正史類にも記されているという。(頼富前掲 p.133)

『舊五代史』卷二五『唐書一武皇紀上』(p.332~333)・卷四七『唐書二十三 末帝本紀中』(p.643)

尚、唐代に流行った毘沙門天信仰に関しては、安史の乱がおこった際、于闐より中国に伝わったという指摘が宮崎市定氏によつてされている。(宮崎前掲 p.60)

- (25) 大正蔵21 No.1249 p.228
- (26) ・小師順子「中国における毘沙門天靈驗譚の設立——安西城靈驗譚を中心に——」(2003年『駒沢大学仏教学部論集』34 p.265)
- (27) 小師氏によれば七五九年頃にはこの説話がすでに存在していると指摘している。

- (28) 大正蔵 21 No.1246 p.219
- (29) 大正蔵 21 No.1248 p.225
- (30) 大正蔵 21 No.1246 p.219
- (31) 『國譯秘密儀軌』中ではこの箇所は誤りか、と記されている。大正蔵（原本である『三十帖策子』も含む）では、特に何も指摘されてなく「中央」と説かれている。
ここで説かれている壇を図で表すと、この第二院に中央はなく、またそれぞれ画く箇所が、東南・西南・西北と説かれているので、この箇所は東北と思われる。
- (32) 大正蔵 21 No.1248p.226
- (33) 火輪の間違いか
- (34) 楊の枝
- (35) 約五メートル
- (36) 約三メートルハセンチ
- (37) 若求曷羅闍愛樂者。取小赤豆一百八顆。一顆一呪火中焼満一百八遍。即大王遣人。喚呪師如箭急急来（大正蔵 21 No.1246 p.222c6～8）
- (38) 又法若行者欲得喝羅闍愛敬者。取赤小豆一顆呪一遍。投火中焼。如是満一百八遍。其喝羅闍即遣人喚来極忽（大正蔵 21 No.1248 p.226a1～4）
- (39) 若求大官人敬重者。取白芥子一百八顆。一顆一呪火中焼満一百八顆。即大官敬如仏大歡喜（大正蔵 21 No.1246 p.222c9～11）
- (40) 又法若欲得大官人愛敬者。取白芥子一顆。一呪投火中焼満一百八遍。其官即自来敬仰大喜（大正蔵 21 No.1248 p.226a4～6）
- (41) 若求大官家婦人等来恭敬者。取蟻子土和檀香水。作泥丸一百八顆。一顆一呪火中焼満一百八遍。即其家遣人来問呪師。当須何物若有所須必不違惜。或時自身来恭敬呪師。若未見呪師時心常憶念也（大正蔵 21 No.1246 p.222c12～16）
- (42) 苦楝木の（栴檀）実
- (43) 若求一切人家恭敬者。当取苦楝子一百八顆。一顆一呪火中焼満一百八遍。即一切人家皆来。恭敬呪師如親父母。心所願求無不称意也（大正蔵 21 No.1246 p.222c17～20）
- (44) 自分に対して恨みを持つ人物

- (45) 菖蒲の根
- (46) 若欲求伏怨家者。取菖蒲根呪一百八遍訖。即摩自身面及口含。其怨家無有不伏者 (大正藏 21 No.1246 p.222c21~22)
- (47) 若有惡人相惱呪師者。心念多聞天王形狀。誦呪一遍。未滿即彼惡人不能行動 (大正藏 21 No.1246 p.222c23~24)
- (48) 又法若惡人相惱亂者。心中想此呪神形。復拳心誦呪。未滿一遍。其人即不能動 (大正藏 21 No.1248 p.226a22~24)
- (49) 心をゆるやかにして、静かになること。許しおくこと。
- (50) 若欲放捨。即作念放捨。彼人還依旧平復 (大正藏 21 No.1246 p.223a1)
- (51) 木の杭
- (52) 若不欲得怨家共同郷坊住者。取苦練木一百八橛子亦得。一子一呪火中燒一百八遍滿。即其惡人不能得住 (大正藏 21 No.1246 p.223a2~4)
- (53) 又法若欲令怨家不同住者。取苦練子一百八顆。一呪投火中。其人即自遠去 (21 No.1248 p.226a24~26)
- (54) 若求諸天大歡喜擁護者。取蘇蜜及菓子。呪一百八遍火中燒。即一切諸天皆大歡喜 (大正藏 21 No.1246 p.223a5~6)
- (55) 又法呪蘇蜜及菓子。一百八遍火中燒之。一切諸天皆大歡喜擁護呪師 (大正藏 21 No.1248 p.226a19~20)
- (56) 梶の木で作った杖
- (57) 若欲遠行時。呪穀木拄杖行。一切難處皆得安無有障礙 (大正藏 21 No.1246 p.223a7~8)
- (58) 又法若欲遠行時。呪穀木柱行一切難處。悉得無怖。 (大正藏 21 No.1248 p.226a20~22)
- (59) 若求一切人愛敬者。呪胡麻一把。呪一百八遍火中燒。一切人尽來恭敬 (大正藏 21 No.1246 p.223a9~10)
- (60) 又法若呪胡麻一百八遍。散著火中。一切人尽來供養呪師 (大正藏 21 No.1248 p.226a26~28)
- (61) 若欲入山離一切惡禽獸及諸惡賊者。取白芥子一百八顆。一顆一呪火中燒及山中散擲。其一切惡禽獸皆悉隱藏。亦一切惡賤不能攀頭 (大正藏 21 No.1246 p.223a11~14)
- (62) 又法若呪白芥子一百八遍散山中。一切惡獸不能傷人。其狩見人即自伏地不敢傷害。過去已後方即起去 (大正藏 21 No.1248 p.223a26~b1)
- (63) 杏子の核の中の肉
- (64) 若欲求乞雨者。取杏人一百八顆。一顆一呪更都呪二十一遍訖即著有龍池水中當時雨下 (大正藏 21 No.1246 p.223a15~17)
- (65) アオギリ

- (66) 若求止雨時。呪一把梧子火中燒。雨即止 (大正藏 21 No.1246 p.223a18)
- (67) 又法若欲乞雨時。取杏子一百八顆都呪三七遍。著有龍水中必得雨下。欲止雨時取梧桐子火中燒之即止 (大正藏 21 No.1248 p.226b1~4)
- (68) 若欲乞食時。先呪鉢一百八遍。所到之處自然得一切飲食 (大正藏 21 No.1246 p.223a19~20)
- (69) 余り、あまり
- (70) 食べる、うける、こうむる。
- (71) 若喫餘者自然化去 (大正藏 21 No.1246 p.223a21)
- (72) 若欲更須食時即至心向鉢呪一遍。即一切飲食還依旧滿足 (大正藏 21 No.1246 p.223a22~23)
- (73) 又法若行者欲乞食。先呪鉢一百八遍。隨所到處。自然而得一切飲食了。飲食殘者當時自化去。若須飲食時。至心向鉢者誦呪一遍。其鉢依還如故 (大正藏 21 No.1248 p.226b4~7)
- (74) 様々な香草を煎じつめたもの
- (75) 若求見功德天女者。当一日一夜不喫食。於佛前燒蘇合香。及呪白花一百八遍散於佛前。功德天女現身。其呪師所求一切財宝。及一切事皆得称心 (大正藏 21 No.1246 p.223a24~27)
- (76) 又法若欲見功能天者。一日一夜不食。於佛前燒蘇合香。呪白花一百八遍。以散神 (佛) 前。其功能天即自現身。隨意所須一切願滿。所求財宝即得称意 (大正藏 21 No.1248 p.226b7~11)
- (77) 若求避一切鬼神者。取白芥子把及蘇。一枚一顆一呪滿一百八遍火中燒。一切惡神無不伏也 (大正藏 21 No.1246 p.223a28~b1)
- (78) 若欲闢除一切鬼神。呪白芥子及蘇。呪一顆一遍。投火中燒之即得 (大正藏 Vol.21 No.1248 p.226b11~12)
- (79) 心の混乱した、悩まず、迷惑をかける。
- (80) 若有惡人。於三宝所起不善心頻頻來惱亂者。呪自手二十一遍。称彼惡人名字遙打其身。彼人即發善心必不來惱亂。若欲改者呪師發慈心。向彼惡人前誦一遍還復如故 (大正藏 21 No.1246 p.223b2~5)
- (81) 若有官人。於三宝中起不善心者。惱亂仏弟子者。欲令起慈心。須作降伏。呪手三十一遍。遙打之其人即著疾。欲好者慈心誦一遍即差 (大正藏 21 No.1248 p.226b13~16)
- (82) 若欲降伏惡人者。呪蘇酪一百八遍火中燒。彼惡人即生恭敬心 (大正藏 21 No.1246 p.223b6~7)
- (83) 二一遍

- (84) 若欲求一切人恭敬者。取土呪三七遍散自身上。一切人見者無不敬仰 (大正藏 21 No.1246 p.223b8～9)
- (85) 又法呪土二十一遍。散自身上。一切人見無不敬仰。(大正藏 21 No.1248 p.226b16～17)
- (86) 惡を伏す力を大威、善を守る功があることを大徳という。
- (87) 若欲求自大威徳者。呪墨著額上。一切人見者無不敬愛 (大正藏 21 No.1246 p.223b10～11)
- (88) 欲令自身有威光者。呪墨塗額上。一切人見者無不愛仰。(大正藏 21 No.1248 p.226b17～18)
- (89) 功德。善行によつて得られる福利。
- (90) 若求大福德人來恭敬者。當取灰呪二十一遍。塗自身上入大衆。一切人見皆歡喜 (大正藏 21 No.1246 p.223b12～13)
- (91) 呪灰二十一遍。塗其身大衆中一切人見皆福德相。衆人供養。(大正藏 21 No.1248 p.226b18～20)
- (92) 四指を持つて大母指を握る
- (93) 若求遠行不被惡獸傷害者。呪自左手。以四指掘大母指作拳。一無妨碍 (大正藏 21 No.1246 p.223b14～15)
- (94) 欲得遠涉道路不被惡人惡狩傷害。行加(如)奔馬。呪左手(以四指握)大母指作印。而去欲得於鏡看事 (大正藏 21 No.1248 p.226b20～22)
- (95) 奔馬は、馬のように激しい勢い、物事が盛んな勢いの例え。
- (96) 鬼魅が人に取り憑き病をおこすこと
- (97) 若欲知童男童女鬼病所惱者。以泥作夜叉形。於鏡前著呪一百八遍。問其惑人病人即自說神鬼名字 (大正藏 21 No.1246 p.223b16～18)
- (98) 呪童子童女問吉凶。其人即自下語。令道所病鬼姓名。即知是何等之病 (大正藏 21 No.1248 p.226b22～24)
- (99) 虫を使った呪術
- (100) 若有人著蠱毒者。呪水三七遍其毒虫即自然出來 (大正藏 21 No.1246 p.223b19～20)
- (101) 若被蠱毒食者。呪所食物二十一遍。其所為毒即吐出 (大正藏 21 No.1248 p.226b24～25)
- (102) 若有人患鬼病者。呪五色線三七遍作三七結。係病人項上其病即除差 (大正藏 21 No.1246 p.223b21～22)
- (103) 若患鬼病呪五色線。一遍一結一百八遍了。係頭上或頂上臂上。一切病患除差 (大正藏 21 No.1248 p.226b25～27)
- (104) 若有患心痛者。取石榴汁呪三七遍与病人飲病即差。或呪石榴枝打其病人亦得差。或黃土塗心上立差 (大正藏 21 No.1246 p.223b23～25)

- (105) 若患心病。呪石榴花汁飲之即愈 (大正蔵 21 No.1248 p.226b27~28)
- (106) 項は首の後ろの部分(うなじ)
- (107) 若患野狐魅病者。呪五色線教童女合繩。呪一百八遍係其項上更呪。楊枝打病人即得差 (大正蔵 21 No.1246 p.223b26~28)
- (108) 若欲捩狐魅病。呪五色線。令童子合成索。一呪一結一百八遍。係項下。復呪楊枝打病者即立愈 (大正蔵 21 No.1248 p.226b28~c1)
- (109) 鑢は鋼、鐵は鉄、恐らく刀(武器として使用する)と思われる。
- (110) 若患腰及骨節病者。以一椀淨水及寶鉄刀。加持呪一百八遍。塗其痛処即得差 (大正蔵 21 No.1246 p.223b29~c1)
- (111) 若患骨節楚病。呪鑢鐵刀禁其病即愈 (大正蔵 21 No.1248 p.226c1~2)
- (112) 若求護自身及同伴者。取白芥子灰及水。呪二十一遍散於四方。即護自身及同伴皆得安樂 (大正蔵 21 No.1246 p.223c2~4)
- (113) 若欲護身。呪白芥子二十一遍。若灰若水亦然。散四方為界 (大正蔵 21 No.1248 p.226c2~4)
- (114) 腫れもの、できもの
- (115) 若欲求治腫腫者。取白檀香呪一百八遍。塗其腫腫上即得差 (大正蔵 21 No.1246 p.223c5~6)
- (116) 胡麻油のことか
- (117) 若頭痛或半身痛者。呪蘇烏麻油二十一遍。塗其痛処即得除愈 (大正蔵 21 No.1246 p.223c7~8)
- (118) 若頭痛或身病呪蘇烏麻油二十一遍。摩塗其身即愈 (大正蔵 21 No.1248 p.226c4~5)
- (119) 又法若患腫者。於舍利塔前。呪石榴黄及檀香一百八遍。塗其腫上。即得除差 (大正蔵 21 No.1246 p.223c9~10)
- (120) 若患腫。呪石榴黄一百八遍塗上即愈。或白檀香亦得 (大正蔵 21 No.1248 p.226c7~8)
- (121) 耳鳴りか
- (122) 若有患耳風者。呪蘇三七遍。与病人食即得差 (大正蔵 21 No.1246 p.223c11~12)
- (123) 若患耳風呪蘇二十一遍食之愈 (大正蔵 21 No.1248 p.226c5~6)
- (124) 頭痛か
- (125) 葉草の名前
- (126) 若有人患頭頂者。呪大黃三七遍塗其痛処即得差 (大正蔵 21 No.1246 p.223c13~14)
- (127) 若患頭病。呪大黃二十一遍。塗額上即愈 (大正蔵 21 No.1248 p.226c8~9)

- (128) 若有人患赤眼者。呪大黃二十一遍。塗其額上即得差 (大正藏 21 No.1246 p.223c15~16)
- (129) 若患眼。呪杏人油塗之立愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c6)
- (130) 若人患氣病者。呪青木香末二十一遍。和水服即差 (大正藏 21 No.1246 p.223c17~18)
- (131) 若患時氣病。呪青木香末二十一遍。和水服之立愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c9~10)
- (132) 二種とも皮膚病
- (133) 黎は黒い。蘆はアシ、イネ科の植物 それを用いて作った末香と思われる。また、「北」で用いられている供物とも同じと思われる。
- (134) 若人患瘡疥及癬病者。呪黎蘆末三七遍。和油塗其病上即得愈 (大正藏 21 No.1246 p.223c19~20)
- (135) 若患惡瘡疥癬者。取利蘆末和油塗上立即除愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c10~11)
- (136) マラリア
- (137) 把りに行かせるの意味か
- (138) 若人患疫病及瘡病者。呪楊枝二十一遍。令其病人把行即得差 (大正藏 21 No.1246 p.223c21~22)
- (139) 若患瘡病。呪楊枝二十一遍令打病人即時除愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c11~12)
- (140) 菩提樹の枝 桑科
- (141) 若人被蛇咬者。呪畢撥散三七遍。塗其咬処即差 (大正藏 21 No.1246 p.223c23~24)
- (142) 若被蛇咬。呪畢撥枝二十一遍。塗之当下即愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c14~15)
- (143) 乾はかわかず、ほす。脯はほしたもの、肉。
- (144) 若人被蝎螫者。呪乾脯火中熱焼拄其病処即除 (大正藏 21 No.1246 p.223c25~26)
- (145) 若被蝎螫。呪乾脯火中焼之。熱拄其上便即除愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c12~14)
- (146) 若有婦人患乳腫者。呪油麻三七遍塗上痛處即除 (大正藏 21 No.1246 p.223c27~28)
- (147) 若婦人乳腫。呪油麻嚼塗上即差 (大正藏 21 No.1248 p.226c15)
- (148) 女性がかかる病氣
- (149) 若婦人帶下病者。呪香水三七遍服即愈 (大正藏 21 No.1246 p.223c29)
- (150) 一五〇若帶下病者。呪丁香水服之即愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c15~16)

- (151) 若人卒患鬼氣狂言癲走者。呪水三七遍令其服即得差 (大正藏 21 No.1246 p.224a1~2)
- (152) 若人卒被鬼著狂言荒語。呪水令服之 (大正藏 21 No.1248 p.226c16~17)
- (153) 若人患心痛者。呪黃土二十一遍。塗其痛處即差 (大正藏 21 No.1246 p.224a3~4)
- (154) 若患心病。呪黃土塗之 (大正藏 21 No.1248 p.226c17~18)
- (155) 若人患鬼魅病者。呪石榴枝一百八遍打病人即差 (大正藏 21 No.1246 p.224a5~6)
- (156) 若患一切鬼魅者。呪石榴枝一百八遍。用打病者即愈 (大正藏 21 No.1248 p.226c18~19)
- (157) 若人欲得婦人愛念者。呪土三七遍散自身上。其人每日憶念心心不斷絕 (大正藏 21 No.1246 p.224a7~8)
- (158) 若人欲得婦人自來恭敬者。常誦呪二十一遍。呪灰散自身上。其婦人即日夜常思前人欲死。若得見面。死不肯去令人欲死 (大正藏 21 No.1246 p.224a9~11)
- (159) 若欲夫婦各自相離遠者。取粳米呪三七遍。散其夫婦身上即時遠去不相擾犯 (大正藏 21 No.1246 p.224a12~13)
- (160) 若有夫婦相憎。欲令和合者。即於天王像前作壇。壇內画夫婦二人形。以種種飲食供養天王像。即取白芥子及菖蒲根末作丸。三百二十一。其丸一呪称其夫妻姓名。即自然和睦更無別心 (大正藏 21 No.1246 p.224a14~18)
- (161) 若欲知山間有阿修羅窟者。当取白芥子和自身血。一呪打滿一千八遍。即山窟自開。其修羅女如火然。持種種香花來取呪師。若呪師入此窟內。壽命一大劫身力還如阿修羅身。亦如金剛無能損者若欲出時。亦得阿修羅女隨從送出。還得到本處 (大正藏 21 No.1246 p.224a19~24)
- (162) 又法若知山間有孔似阿修羅窟者。当呪白芥子和自身血。一呪一遍打山間孔。尽一千八遍。其山窟自開。其阿修羅女身如火然。持諸香花迎呪師來。行者入此窟內。壽命一大劫身力還如阿修羅。亦如金剛無能損者。若欲出時亦得一切阿修羅女隨從。若不還時亦到火終無所害 (大正藏 21 No.1248 p.226a9~16)
- (163) 香筍 筍は入れもの
- (164) トネリコ モクセイ科の落葉高木
- (165) 三は 煖・焰・光という (國譯参照)
- (166) 若求隱身者。將此天王像。於舍利塔前以香泥塗地。以種種香花散彼壇內。亦須種種飲食供養天王像訖。取梨木作合子。取安悉香善那石各作末。和秦膠水作丸。盛合子中著壇上。即行者作一對新淨衣。洗浴著衣天王像前坐。一日不食誦此呪一千八遍竟。亦不勞三事相現。但誦一千八遍訖。塗眼上亦塗腳掌心胸前兩膊上訖。合掌至心。思念自身猶如虛空無有自身。作此想時行者即得隱身。

日行千里一切事業皆得成就（大正藏 21 No.1246 p.224a25～b5）

- (167) 又法將此像向舍利塔前。香塗地香花散於壇內。上妙供養了。取梨木作合子。取安膳那石為末。用秦膠水為丸。盛於合子中置壇中。行者著新淨衣。在於像前一日不食。誦此呪一千八遍了。亦無勞三相現。呪一千八遍訖塗眼竟。即塗腳掌心中胸前兩膊上頂竟。至心合掌思身如虛空。無有身相作自想時。行者隱形日行千里。一切事業並皆悉見（大正藏 21 No.1248 p.224a16～24）

- (168) 自身にも被害がこないことの例え

- (169) 一度食事をする程、短い時間の例え

- (170) 若求降伏外道。及自身火不燒者。取自身血魚血相和。唵心誦呪三七遍。投火中經一食頃。不被火燒自身（大正藏 21 No.1246 p.224b6～8）

- (171) 又法欲得伏外道入火中。取自身血魚血。唵心誦此呪二十一遍。投火中即入火中。得一頃食間不燒其身（大正藏 21 No.1248 p.227a24～26）

- (172) 「手印品四」中で説かれている印のことか、（業叉身印）

- (173) こかりの心、静寂でない心。

- (174) 若降伏外道者。結前身印作唵心。默誦呪一百八遍。一切外道所有法術。皆悉破壞並不成就（大正藏 21 No.1246 p.224b9～11）

- (175) 又法若欲降伏外道。手中結印。唵心誦呪一百八遍。外道所作法悉破壞並不成就（大正藏 21 No.1248 p.227a26～28）

- (176) 毘那耶伽 (vināyaka) ガネーシャ神の称。困難等の意味もある。

- (177) 木の名前、堅固樹。銅娑羅は（娑羅）で作った器のことか

- (178) 撒くこと

- (179) 若除毘那夜迦等一切鬼病者。燒安悉香作大唵心。急急誦呪。把石榴子打病人。其一切鬼病天疫龍疫自然消滅又若未作法時。其病人或歌或咲或坐或走。若大力鬼去後。以銅娑羅中著水和灰麵。門外撥瀉訖。燒安悉香誦呪一百八遍已。後更不來惱乱又若以銅娑羅。中盛灰。灰中著白花亦得治病（大正藏 21 No.1246 p.224b12～20）

- (180) 又若解穢者。当作壇。以牛糞泥壇。方四各闊狭兩肘。取一童子淨潔洗浴。著新白淨衣壇上蹲坐。童子兩手脚及捻娑羅上。以燒安香薰童子身誦呪。即娑羅動。即其童子自攝示有賊处（大正藏 21 No.1246 p.224b21～25）

